



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Organ Transplantation Metaphors A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	HUGUET CAÑAMERO, Enric
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16063号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92949
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Enric_Huguet_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）氏名：ウゲット＝カニャメロ エンリック

学位論文題名

Organ Transplantation Metaphors

A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers

(臓器移植のメタファー

—コーパスに基づいた、新聞における命の表現に関する比較研究—)

本論文の観点と方法：本論文の目的は移植医療がグローバルな現象から複雑でローカルな現実へと変わっていく過程を、メタファーの使用に着目して理解することである。具体的には、臓器を移植するという思考が一つの解釈に限定されず、臓器のドナーやレシピエント及びその家族と医療機関及び政府や宗教団体などの組織との継続的な対話を通じて多様な感性に適応していくことを解明する。さらに、移植医療の基本原則と個別具体的な特定の文脈との関係に焦点を当て、その対話がどのように行われているのか詳細に明らかにする。それらの課題を念頭に置いて、筆者は、新聞記事を概念メタファー理論を用いて分析する。特に、メタファーが移植医療の包含するものを覆い隠したり強調したりすることによって、臓器移植談話の発展に影響を与えていることを記述し、臓器移植がどのように日常化・一般化していくかを説明する。そのため、臓器交換における「命」(life, vida, 命)という中心的な概念に注目し、日本、米国、スペイン、韓国の4カ国の新聞記事コーパスに基づき、メタファーの使用について比較する。

本論文の内容：本論文は、第一部「研究の枠組み」と第二部「新聞記事コーパスに基づいた事例研究の提示」という二つの部分から構成される。

第一部「研究の枠組み」は、序論に加えて「研究理論」と「研究方法論」からなる。研究理論は次の三部分からなる。①概念メタファー理論の基本的な特徴の説明。さらに、メタファーの認知的な働きについて説明し、その背景にある認知的な機能について詳述する。②メタファーに基づく文化的な基盤の確認。具体的には、メタファーと文化との関わりについての代表的な見方について述べた後、両者が関わる各段階の記述を行う。加えて、文化的モデルがどのようにメタファーの生産と関連するかを記述する。③移植医療に言及しつつ、イデオロギーと文化の相互影響を主眼に置いて談話におけるメタファーの生産について説明する。特に、メタファーの生産が文化的な枠組みによりどのように形成されるか、及びメタファーに伴うイデオロギーがどのように文化に適合させられるかが記される。最後に、臓器移植、特に移植された臓器を指す「命」という言葉が臓器移植と関連するメタファーの土台になり、本論文においてメタファーを確定するための中心的な概念になることが説明される。

研究方法論は次の三部分からなる。①コーパスに基づいたメタファーの研究の分野における本論文の位置付け。また、各国における臓器移植のメタファーを確定するための

新聞記事コーパス作成過程の説明。具体的には、本稿の対象となる各新聞社とその選定基準。②新聞記事コーパスにおいて臓器移植を指すメタファーを発見する分析方法。具体的にはコーパスにおいてメタファーを見つける最も代表的な方法が紹介され、本論文が参照したメタファー認定基準が説明される。③コーパスから得られたデータを分析する方法。確定されたメタファーが分類される話題を特定すること、その話題の利用を説明する文脈的要因を決定すること、対象各国において臓器移植談話が日常化するためにその要因を支える戦略への批判的な考察も含む。

本論文の第二部「新聞記事コーパスに基づいた事例研究の提示」は全4章で構成され、米国、スペイン、日本、韓国における臓器移植談話のメタファーの体系的な使用が分析される。そして最後に、結論が置かれる。第1章は米国の分析で、臓器移植の比喩的表現として「命の贈り物」という概念の重要性が明らかになる。この「命の贈り物」という概念にはキリスト教的な背景(利他主義)がある。一方で命は与えられたものと解釈され、交換される所有物として臓器移植談話の軸であり続けている。この解釈は米国だけでなく多くの国の移植システムに浸透している。他方で、「ゲーム」としての命の解釈は米国の新聞記事コーパスにおいて、移植医療を指す代替語となる。臓器移植を見るこうした観点は「命の贈り物」という概念が根強く残るキリスト教的背景から距離をとり、贈与に相当する臓器交換が含む負担を軽減する。移植医療の独特の理解をもたらしながら、贈与レトリックという枠の中に収められる身体の所有観という束縛からの解放となる。

第2章はスペインが研究対象で、分析結果によるとスペインでは命の概念が所有物、特にドナー・レシピエント間で交換された贈与品として重要視される。他方、臓器移植の「連带的な行為」としての理解が臓器移植談話の中でさらに拡大している。臓器提供・移植を集団的な試みとして描く後者の理解は、米国の臓器移植談話の枠組みを形成している英雄主義を超え、利他的な贈与レトリックを二次的なものにする。最初はキリスト教的な人間愛として、そして次は連帯感の概念として流行したこの理解が、贈与交換に伴う義務感を周縁化させると同時に共同体の一員としての個人の責任感を強調する。初期段階から移植医療に対する公的機関の支援の働きが存在してきたスペインの新聞記事を分析することで、市民としての個の尊重を訴えつつ、「命の贈り物」の論理に伴う身体の商品化を覆い隠すという、臓器提供・移植がもたらす別の意味が明らかになる。

第3章では日本が研究対象となり、臓器移植の代表的な理解としての贈与のレトリックがその働きを失いつつあることが明らかとなる。日本においても臓器移植談話が日常化・一般化されていく過程でメタファーが中心的な役割を果たしてきた。その中では「命」の概念が談話の軸になっており、所有物や「つなぐもの」(具体的には贈り物、バトン、絆)として臓器移植を支えてきた。特に、「絆」としての命の理解が重要となった。ここ数年、ドナーとレシピエント、双方の命を結びつける行為としての臓器移植を指す「命をつなぐ」という表現の使用率の上昇がそれを表す。絆のイメージは、臓器移植をより宗教的・文化的に根付いた「命」の理解に基礎づけることで、日本社会で激しく議論されてきた移植医療のもたらす諸問題をローカルな視点から再解釈することを可能にする。

第4章では、韓国の新聞記事コーパスの分析結果によって、贈与レトリックから離れた「命のわかちあい」という別のメタファーが示される。そこでは共有所有物としての命の理解が浮き彫りとなるが、これは特に韓国の移植システムの発展に携わる当事者の

多くに支えられてきたモットーである。交換される所有物としての「命」と獲得される資源としての「命」では異なるが、臓器移植の結果としてそれらを「わかちあう」という発想からドナーとレシピエントは対等な立場に位置付けられ、日本の「つなぐ」という発想のような、贈与の論理がもたらす束縛から両者を解放する。ここでいう「わかちあう」とは、主に「家族的な分かち合い」のことで、「私たち (우리)」の語が重要な役割をはたす。さらに、「贈り物」の概念と密接に関わる利他主義が克服され、ドナーとレシピエントの関わりは同一の共同体に遡るものとして再構築される。